

両親から受け継いだ大切なもの

【あらし】

「お客様を大事にせな、お前ら子どもを大事にできひんのや」

何代も続く手打ち麺の店を営む父が、腹の底からしぼり出した言葉に、筆者は初めて親の本当の愛を感じる。「親の心、子知らず」という言葉がある。筆者は自営業の家庭に育ち、毎日忙しく働く両親に、子どものことなど何も考えてくれないと、ずっと寂しい思いをしていた。しかし、高校受験という人生の大きな経験を通して、筆者は両親の愛情を感じるまでに成長する。親子の思いのすれ違いは、よくある話ではあるが、互いに一生懸命に生きている家族の話には深い愛がある。

●小見出し

自営業の家庭に育つ
「お前らにかまっとれん」
母に初めて認められる
両親を見返したい
父の変化と志望校合格
ようやくわかった両親の本心
両親の生き方を受け継ぐ

私の家族は父、母、祖父、祖母、姉、私、そして、私が小学五年生の頃に生まれた妹、といった構成である。祖父と父が自宅で「手打ち麺処」を営んでいる自営業の家庭である。両親も祖父も、毎日家で忙しく仕事をしている。この環境が幼年期の私を孤独にさせていた。

自営業の家庭に育つ

両親は、毎日朝から夜まで仕事をしている。自営業は自由なのではというイメージもあるかもしれないが、実際、自由などあまりなかった。休みの日を変えるのは簡単ではない。毎日のように利用してくれる常連のお客様もいて、迷惑がかかってしまうからだ。定休日はあるが、うちの場合は平日の火曜日だけ。土日や祝日には休めなかった。

幼稚園や小学校の休みは土日、祝日。しかし、休日のお店は忙しく、平日でもばらばらだが、お客様がある。一日が長かった。毎日、両親と顔を合わせることはできる。一人になる時間はない。だから寂しくはなかったはずだったが、そんなのは嘘だった。

私は本当に休日が嫌いだった。とても退屈だったからだ。それとは逆に、両親は大忙し。なかなか相手もしてくれないし、当然お出かけなどしたことはなかった。だから、周囲の友達がとても羨ましかった。そして、憎く感じていた。休日明けの幼稚園や学校は、苦痛で仕方なかった。「土日どっか行ったん？ 何しとったん？」

「家族で〇〇へ行った〜！ パパに連れてってもらったわ〜！」

そんな会話を聞くのが辛かった。ちっとも楽しくないし、笑えなかった。けれど、我慢して笑顔を振りまいていた。私もどこか旅行に行きたかったし、お買物の付き添いでさえも喜んで行っただろう。土日が休みの仕事をしている親の友達に羨ましくて、自営業の子どもに生まれたのが本当に嫌いだった。

「お前らにかまっとれん」

幼稚園や小学生の頃、休日は二歳上の姉と二人で遊んでいた。周囲の友達がたいい休日はどこかに出かけていることが多かったからだ。たまにお店が準備中になると、祖父が私たちを近くの公園や、おもちゃ屋さんに入れて行ってくれたのを覚えている。嬉しかった。しかし公園にはピクニックに来ている家族がいるし、おもちゃ屋さんにも両親と一緒にの子どもたちばかり。切ない気持ちになった。

私がまだ小学校一年生だった頃、姉が習い事からお腹をすかせて帰ってきた。ばたばたと帰ると、両親に、「ねえ、夜ご飯もうできた？ お腹減った！」

と言った。私も正直お腹が減っていた。時計を見たらもう夜七時近く。飲食店を営んでいるうちでは、この時間はちょうどピーク時である。親は家事などできる状態ではない。うちの夕食は、夜八時閉店なのでそれ以降になる。場

合によつては、夜九時過ぎに夕食というのも当たり前だった。毎日これが続くため、活動範囲が広がって遊んできたり、習い事などに行つて帰ってくる頃にはお腹が減る。自己主張が強くなつた年頃の姉は、親にいつも不満を訴えていた。

ある日、とても忙しい時間に、同じように帰つてきて同じことを言う姉に、

「うるさいわ！ まだ仕事忙しいで、そんなもんやつとれへんのや、我慢しろ！」

と父が怒鳴つた。姉は半泣きになって、その後の食事でもずっとテレビを見ていて、お腹が減るのを通り越していつも眠そうだった。私も同じで、そんな姉の横で夕食をとつていた。すごい勢いで怒る父親を見て怖くなつた私は、それからますます自分の主張がでなくなつた。お腹が減つても我慢。お出かけしたいなんて言つたら、もつと怒られるんじゃないかとびくびくだった。夕食がすむと十時頃。ご飯を食べたらすぐお風呂に入らされ、「早く寝なさい」と毎日のように言われていた。

お風呂は幼稚園の高学年から姉と入るか、一人で入っていた。私のまわりにいた友達の家は、夜六時頃に夕食をとり、入浴後は、家族でテレビを見てから寝る。そんな家が多かつたため、自分の家と比べてしまつて、切なかつたり羨ましく感じていた。

そんな日々を過ごし、私たち姉妹は思春期をむかえた。私はいつも姉の後ろを歩いていたので、何も自分からは言わ

なかつた。親や姉の様子を気にして、顔色をうかがっているだけだった。今でもそんな性格が残っているが、その頃はひどく心配症だった。姉は私とは正反対。自己主張が強く何度も親と喧嘩していた。中学一年のある日、部活を終えて帰宅した姉と私は、いつものようにお腹をすかせていた。しかし、その頃の姉は反抗期で、親にむかつて、

「ご飯まだなん？ お腹減つて死にそうなんやけど！」

と不機嫌な態度をとつた。それを見て父は、

「何で待つとれへんのや！ 何も手伝わんと、そんな文句を言うな。こつちは仕事やわ！」

と姉に向かつて激しく怒鳴つた。姉は怒りをむき出しにし、

「もう、仕事ばつかで、うちのこと何もしてくれやん。仕事の方が大事なん？ あたしらは大事じゃないやん！」

と父に泣きながら訴えていた。

私も姉と同じことを思っていた。姉が怒鳴つた瞬間、私も言つてやろうという気分になつた。しかしやっぱりそんなことはできなかつた。思わぬことを父親から言われてしまったからだ。

「仕事が大事や！ だから、お前らには今かまつとれんや！」

そう、父には仕事のほうが大事だった。母も何も言わずに店のことをしていた。無関心なのかと思うくらい冷たい態度だつたと思う。私は、父を黙って見ていた。この言葉を聞

いてからは、両親の前で素直に物を言うことができなくなってきた。言ってもしょうがない、仕事なんだ。大事なものは仕事。ひねくれ者のようだが、素直になることが悪いことのように思っていた。

母に初めて認められる

中学生になると、私は部活で遅くなったり、友達と遊びに行ったりして帰りも遅くなり、家にいる時間がだんだん短くなってきた。休日でも友達と遊び歩いてなかなか帰らなかった。家の居心地が悪かったからだ。出かけるわけでもないし、休日はバタバタして騒がしい。両親も仕事ばかりで、家にいたら都合よく私や姉を手伝わせる。何も用事がなく家で過ごしていると必ず「手伝え」と言われ、テスト期間でさえも関係なく使われていた。私のテストなんかより、両親にとつては店の仕事が効率よくできればよいのだ。

しかし、そんな両親に相変わらず何も言えなくて、その代わりにストレスを発散するために、ほぼ毎日のように友達と夜まで遊んで帰っていた。祖父母は少し心配してくれていたようだ。祖父母は穏和な性格で、私にはもちろん、両親にも何も言わなかった。両親もこんな私の生活や態度に対して特に何も叱らなかつた。仕事が大切で、子どもことは二の次だったから。

中学三年になり、受験生と呼ばれる時期にはいった。しかし、私は部活と遊び中心の生活をしてきたため、受験の

準備が遅れていた。姉は、一年前に地元の進学学校に入学して落ち着いていた。

そんななか、何も今まで関心を向けてこなかった母が私の進路について考え始めたのだ。母は姉と同じ、地元の進学学校に入れと言ってきたのだ。しかも、その学校以外を受験するときは、電車通学を禁止し、家から通える範囲と限定してきた。今まで無関心で何も気を向けてくれなかった母親に指示されることにすごく苛立って、私は進路の話を自分から母親にはできなかった。私は電車通学に憧れていた、制服や校風が気に入ったM高校に入りたかった。進学校だし、ここに入れば何も文句を言われることないので、思い、勇気を出して両親に話してみた。

しかし、母は機嫌を悪くし反対してきた。理由は、その夏までずっと遊び歩いていたような子だったから、駅周辺で毎日遊んでくるはずだと言うのだ。確かにそれも楽しみだったけれど、自分の学力の面なども考えて言ったつもりだった。

この頃から、父と母の喧嘩が目立つようになった。このそのり内容を聞いたら、私の進路についてだった。父も母も近くの高校に進んでほしいというのは同じである。しかし、電車を利用せずに通える高校は周辺に二つしかなく、その二校は県の中でトップクラスの進学高校で、もちろん私はその二校の偏差値にはとどいていなかった。それを知っている父は諦めるかのように、

「あーもうええわ、好きにしたらええやないか」

と言いつつ。母は父にもつと厳しく言いつつほしいと頼んでいた。電車通学はお金がかかるからはじまり、姉と同じ高校に行ってくれたら楽だという話も聞いた。父と母の言い争いに嫌気がさして、親の期待は自分たちの手間、世間体や金銭面のことしか考えていないように思えてきた。

ある日、学校の先生との面談で県外の学校を薦められた。その学校は、私がそのときに少し興味をもっていた留学制度などがきちんと整っている高校だった。とはいっても、確実に電車通学になるのでその話は聞き流した。

しかし、その日から妙に英語に対する気持ちが強くなり、先生に薦められた高校のホームページやパンフレットを見ているうちにその高校に行きたくなかった。私立高校のうえ、県外なのでお金もかかれば、両親の私への「変」な心配もより深刻になる。だめもとで両親に話してみたら、もちろん消極的な言葉しか返ってこなかった。

しかし、母は初めて私が自分で進路について調べて考えたことが嬉しかったのか、受験することだけはとりあえず賛成してくれた。昔から私は自己主張してこなかったし、何より勉強せずに遊んでばかりだった私が、ちゃんと自分なりに自分の進路について考えて、自発的に動いたことが認めてもらえたのだらうと思った。それとは裏腹に、父は余計に機嫌を悪くしていた。

「もう勝手にすればいいやないか」

両親を見返したい

受験が近づいてきた。遊び歩いていた時期とは打って変わって、毎日朝から夜中まで勉強した。母は私が希望した高校の受験を条件付きで許してくれた。その条件は、「特待生で受かったら」であった。私立だからお金がかかる。厳しい条件だったが仕方なかった。やれるだけのことをして受験を終え、結果を待った。普通なら公立の入試に向けて切り替えなければいけなかったが、私はなかなか、そうはいかなかった。公立高校に希望する学校がなかったからだ。さらに私のやる気を喪失する出来事が起こった。希望していた高校の合格通知だった。

合格はしていたが、母の条件である特待生にはなれなかった。私が獲得したのは入学金免除というランクで、わずかなが母の条件に届かなかった。

それからは勉強する気にもなれず、周囲の友達はみんな公立高校の願書も準備して、勉強をはじめていたが、受験どころじゃない気分だった。父と母の喧嘩も頻繁にみるようになった。

そんなとき、高校の英語の先生が私を面談に誘ってくれた。先生は、公立高校の受験をしなさいという。何もやる気が出なかつたので、先生に今までの経過をすべて話して相談しようと思った。と、そのとき先生は姉が進学した地元に進学を薦めてきた。「両親と一緒だ…」それしか最

初は思えなかった。

ところが、先生が薦めたのはその高校の英語科だった。受験校を考えていたときの私の成績では決して入れそうもない科で、自分自身もそれを聞いた瞬間、すでに諦めていた。しかし、そのときふと両親の顔が浮かんだ。あれだけ喧嘩し、私に制限してきたのだから、なんとか見返したい気持ちが強くなってきたのだ。

その日から毎朝五時に起きて登校する八時まで勉強し、帰ってすぐ勉強、夕食とお風呂の後から夜中の二時までまた勉強という日々をおくった。親とは何も話さなかった。勉強に必死だったからなのか、両親との会話が気まづかったからかよくわからない。母と口を利いたのは、嫌々受けると言つて願書を出しに行つたときくらいだった。

ここでも素直になれていない自分がいた。私はこの時期、受験勉強を始めてから五キロ以上体重が減つて、目の下は毎日隈だらけだった。両親が起きる前から勉強し、両親が寝てからも勉強していたからだ。

父の変化と志望校合格

入試の前夜、何故か父が、勉強している私の部屋に來た。私の体調を心配してきたようだった。そして、父は目を真っ赤にさせて私に言った。

「大事なときに悪かったな、集中できへんかったやろ？ お母さんら、みんな心配していろいろ言ってきたわけやけどな。

お前がやりたいようにやればいいんやでな。無理しやんでもいいけど、頑張れるだけ頑張つてほしい。ちゃんと寝て、明日頑張つてな」

父は三人兄妹の長男で、先祖から受け継いで今のお店を経営している。父は高校生の頃、車が大好きで将来は車関係の仕事をしたかったようだ。しかし、祖父が強制的に父を名古屋に修業に出して将来を決められてしまったのだ。父は何も言えず、ただ従うしかなかった。祖父も同じだった。長男の祖父は勤勉で学生時代に大学への進学を希望していたようだ。しかし、親から強いられてお店を継ぐことになったのだ。そんな祖父の気持ちもわかったから、父は納得して仕事を受け継いだのだった。しかし、五年生のときに生まれした妹を含めてうちは三姉妹。

「お前らには好きな道を進んでほしい。俺は好きなことはできへんかったけど、今の仕事を好きになって頑張れとる。間違つた道に進んだわけやないけどな」

私は父からこう聞いたとき、胸が痛くなった。同時にとても気分が晴れた。私たち子どもの事を何も考えていないわけじゃなかったことに気づいた。私の進路に対して、父が機嫌を悪くしていた理由もなんとなくわかってきた。父には学生の頃、自分の進路の選択肢などなかったからだ。姉のちよつとしたわがままや、私の自由な進路の選択に対して羨ましいというか、勝手だなと思つてしまう父の気持ちが少ないからずわかつてきた。

合格発表の日、私は正直、諦めていた。合格をもらっている私立の学校も自分の進みたい道だった。どこに入っても自分を信じて頑張る。両親にも迷惑をかけないようにと、そんな気持ちでもう公立の合格にこだわっていなかった。

学校に着くと、英語科の合格には自信を持てなかったが、何とかスライドで受かっているんじゃないかと思ひ、まずは普通科の掲示板を見てみた。

何度も見たが、私の受験番号はなかった。「受かってないんだな」と思って、会場にかけてくれた中学の先生に不合格だったと伝えた。でも、そのとき、なぜか両親の笑っている顔がふと浮かんだ。今でも不思議でありえないようなことだが、すっかり覚えてる。英語科の掲示板を見た。「あつたー!」。私は地元の進学高校の英語科に合格したのだ。びつくりしすぎて手が震え、電話をなかなかかけられなかった。落ち着かないまま、中学の先生に報告してから両親に電話をした。

「は？ 嘘やろ？ …えーっ！ 良かったじゃん！」

両親は、私以上に驚いていた。それがとても嬉しかった。「両親が自分よりも喜ぶことってあるんだな」と、このとき初めて思った。この嬉しさから、私はこの高校に入学することを決めた。受験前の自分の成績と姿勢を考えると、想像できないような現実だったので、自分自身も満足だった。迷いは何もなかった。

ようやくわかった両親の本心

高校に入ってから、両親は相変わらず忙しい毎日をおくっていた。そんな両親を見て、家から近くの高校をいこと、私はなるべく早く帰宅した。妹はまだ幼稚園や小学校に通う時期だったので、早くご飯を済ませて寝かせなきゃいけない。学校の課題も大変だったが時間をうまく使って、妹や両親のために夕飯の準備を手伝い、毎日計画的に過ごすことができた。

ある日、妹がお腹を空かせて帰ってきたのに夕食の準備ができなかった日があった。両親は妹を叱った。このとき、小さいときに姉も私も同じように叱られた日のことを思い出した。私はその日の夕食時にあえて話してみた。

「パパたちね、私とお姉ちゃんがお腹空いたって言ったら、怒ったよね？ 妹も同じじゃん。うちら、仕事のほうが大事って言われたし、まあしゃあないんやけどね」

このときは、もう笑い話としてできた。父親は、「そうやなあ、実際仕事が大事なんや。だって仕事せんかったらお前ら育てらへんやわ。うちの店はお客様が大事なんや。お客様を大事にせな、お前らを大事にできへんや」

大きくなつてから、やっと理解できた。母も、「いつでもあんたらのわがまま聞いてあげたいよ。だって我慢ばっかりさせとるのはわかってるんだからね。でもお母さんらも我慢しやなあかんのね」

母は無関心でも何でもなかった。母なりに考えてくれて

いたからこそ、何も言わなかったのだと思った。何も言わなくても、こうやってわかるときがきたのだから。そんな両親の仕事に対する姿勢と、その裏にある私たちへの思いがすごく嬉しかった。それにそんな両親を素敵だと改めて思うことができた。

両親の生き方を受け継ぐ

私は今大学で勉強もしている。自分の好きなこともちやんとできている。きっと両親は私たち姉妹の誰かにお店を継いでほしい、と思っているはずだ。母も嫁いでくる前は保育士で、子どもが大好きだった。今でも保育士に戻りたいと話す。しかし、今はここが私の仕事場であって、私の夢なのだとする。両親は冷たかったように見えて、本当は誰よりも私たちの事を考えていたのだ。私はそんな両親の働いている姿を毎日見て育ってきた。

小さい頃は、サラリーマンの家庭が羨ましかった。しかし、私の方が幸せだと、今は思っている。親が働く姿を見て、大変さや仕事の大事さを目で見て、感じてくれた。家事を手伝わされるのは苦痛だったが、それも誰もができることではない貴重な体験だったのだと思う。私は自営業の家に生まれて損だ、と正直思っていた。でも、誰もができない経験もできているはずなんだなと思った。将来、店を継ぐことは望んでいない。しかし、両親のようになりたいと思う。

両親から受け継いだものは、今の私。私は将来自分のや

りたい仕事を精いっぱい頑張りたいと思う。そして、今しかできないことをたくさん体験して、いつか自分が親になったら、そんな体験や知識を子どもに話していけるような親になりたいと思う。小さい頃の私にはわからなかった両親からの愛情を、大人になった今、しっかりと感じて生きている。